

# 登校拒否児童生徒の自己表現に関する一考察：箱庭と自画像を通して

著者	山谷 敬三郎, 野崎 嘉男
雑誌名	北海道女子大学短期大学部研究紀要
巻	33
ページ	147-152
発行年	1997
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00001000/">http://id.nii.ac.jp/1136/00001000/</a>

# 登校拒否児童生徒の自己表現に関する一考察

— 箱庭と自画像を通して —

A Consideration on the Self-Expression of the Refusal to Attend School

— Through the Sand-Play Therapy and Self-Drawing —

山	谷	敬	三	郎	野	崎	嘉	男
Keizaburo		YAMAYA			Yoshio		NOZAKI	

## I は じ め に

登校拒否の治療の根本的態度としては、児童生徒の中に潜在している自己治癒力を信頼し、教師や教育相談担当者によって守られている空間で、児童生徒が抱える葛藤の真相を自由に表現できるよう支援することが必要である。このことは非常に大切であるが、児童生徒の自己治癒力に頼るといっても、それを適切に表現しうる場や機会、方法がなければ意味がない。箱庭は、カルフのいう「自由にして保護された空間」であり、児童生徒の自己表現に有効であるばかりでなく、児童生徒の自己治癒力を喚起するのに有効である。また、絵画も箱庭と同じように、単なる技法を越えて、児童生徒に「暗黙の理解と受容」を感じさせる。しかし、教師や教育相談担当者が児童生徒の作品の解釈にのみ奔走し、子供との間に広がっている目に見えない感情空間に配慮が行き届かないとき、これらの有効な自己表現の技法は意味をなさない。

山谷は、1980年、公立中学校の教育相談担当教師として登校拒否の生徒とはじめて直接的なかかわりを持ち、その後、北海道立教育研究所の相談活動や北海道教育委員会の電話相談などをとおして、児童生徒、保護者、教師と相談活動や事例研究を重ねてきた。幸い、北海道教育委員会が本年度から開始した、北海道立砂川少年自然の家で実施している登校拒否の児童生徒を対象としている野外体験活動「さわやかフレンドリー」事業の企画と運営の助言者並びにカウンセラーをする機会を得ている。本事業では、本学の学生も参加しているところであるが、学生ボランティアの活動が有効に生かされている。これらの学生から、登校拒否の児童生徒の心の変化を理解する資料提供の希望が筆者に寄せられた。

本稿では、登校拒否の児童生徒の心理的な変化を理解する上で、今まで山谷が担当した事例の中から箱庭による表現と自画像を取り上げ、共同で考察することとした。本事例は、カウンセラーとしての自己の研鑽の不足を露呈することになるが、山谷自身の指導の反省とともに、現在進行中である「さわやかフレンドリー」事業とのかかわりを考慮し、今後の指導の手がかりを得ることをねらいとする。

## II 自己表現と登校拒否

### 1 自己表現の未熟な子供の特徴

「登校拒否の児童生徒との面談で、最近感じるものの一つに『自己表現ができない子』が増えている<sup>(1)</sup>」と川村道夫はいう。

川村が指摘する自己表現が未熟とは、「表現能力に特別支障がないにもかかわらず、自分の心の中にあるものを、言語や非言語で表現できない。また、表現したとしても相手に正しく伝えられない、あるいは伝わらないこと<sup>(2)</sup>」を意味する。すなわち、「対話」や「かかわり方」が不適切な状態である。このような自己表現の未熟さの原因を探るには、一人一人の生育歴や生まれ育った環境など、幼児期からの様々な諸条件を適切に把握することが求められるが、実際に教育相談を通して整理すると次のようにまとめることができる。

#### ① 体験不足

自分の気持ちや考えを表現しても、そのことが無視されたり、拒絶されたり、誰かに自分の感情を受け入れられた経験が少ない。特に、幼児期における「遊びの経験」あるいは「対人関係での失敗」や「誉められる、認められる体験不足」のため、自尊感情が育たなかったことが影響している場合がある。

#### ② 人間関係の希薄

子供が育つ環境は、核家族化の進行に加えて閉鎖的となり、子供たち同志の交流も少なくなっている。学校から帰っても、「巣ごもりする子供」と言われるように、テレビゲームやビデオ等があることから、友達と遊ぶ必要がなくなり、家に引きこもり、子供の時に育たなければならない人間関係が希薄になってきている場合がある。

#### ③ 親の養育態度

親の養育態度として、例えば、過保護の傾向がつよく、子供のできることまで親が先回りをして世話をやきすぎ、干渉しすぎるため自律的な行動ができない。あるいは親の厳格な養育により、失敗を恐れ避けようとする防衛機制が働き、親の言いなりに育てられてきた場合には、子供の自由な自己表現が抑えられる。

上にあげたことは、自己表現の未熟さのみではなく、児童期、少年期の様々な不適応状態に間接的に影響を与えることは否定できない。さらに、自己表現の未熟さにかかわるものとして親の養育態度、生活経験や性格的なものの他に、最近における児童生徒の遊び時間の不足や遊び場の減少など、生活環境の変化が大きく影響していると考えられる。したがって、自己表現の未熟な子供に対して、教育相談を進める際、子供の言動の背後にある気持ちを少しでも汲み取る努力が求められる。

### III 登校拒否の児童生徒による箱庭と自画像

#### 1 箱庭による表現

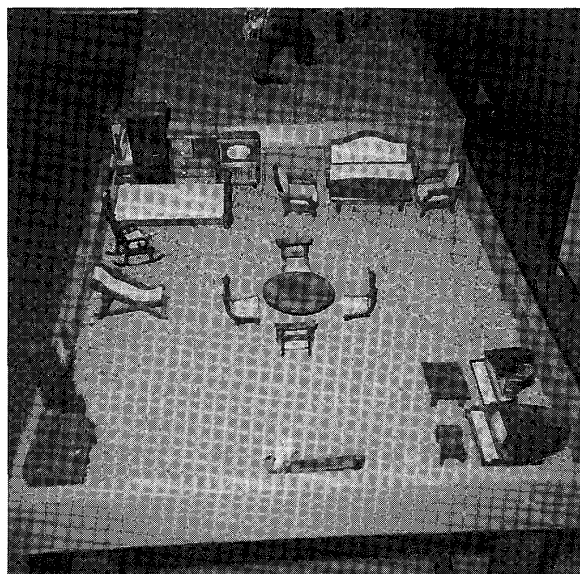
箱庭療法 (Sandplay-Therapy) は、カルフ (Kalff, D.M.) が、メラニー・クライン (Klein, M.) の弟子であったローウェンフェルド (Lowenfeld, M.) の「世界技法」をもとに、ユング (Jung, C.G.) の分析心理学の考え方を加味して発展させたものである。日本には、1965 年に河合隼雄によって紹介された。箱庭療法は、いうまでもなく、治療技法の一つであり、自分の心の様相を言葉で表現することが難しい子供たちの内的世界をイメージという形で表すことによって、また、大人の場合にも非言語的なメッセージを箱庭の中に示すことによって、そのクライアントとセラピストがともに個性化、社会化の過程を歩んでいくプロセスが展開されるものである。次に示す箱庭は、筆者が平成 2 年に北海道立教育研究所で担当した登校拒否の小学校 5 年生の女子、Y 子が作成したものである。

Y 子は小学校 3 年生から登校を渋り、4 年生ではほぼ全休、5 年生になって、同研究所に訪れた 2 学期 (10 月) までは、欠席が続いている状況であった。欠席の期間中、様々な相談機関や医療機関等に訪れたが、改善されずにいた。初めて来所したこの時期には、家庭生活でもやや落ち着いた状況を示していた。初対面では、同行してきた 2 年下の妹と一緒に遊戯室でランプやミニチュアのボウリングなどをして過ごし、次回の来所を約束した。父親と母親の相談担当者とのケース会議において、Y 子の日常生活の様子や幼児期からの生育歴等が報告されたが、特に、不登校の原因となることを特定できず、筆者は不登校の原因を学校生活における教師との人間関係等に求めようとしていた。

第 2 回目の相談活動において、箱庭の製作を進めた。写真①は、平成 2 年 11 月に作成したものである。

写真中央には、食卓テーブルが置かれている。ピアノや家具類が整然と並べられているが、用いられているものはほとんどが無機質のものであり、手前のベンチに置かれた花束だけが生物である (実は、筆者はこの花束を見落としていて、約 6 ヶ月後に写真を見て確認できた)。この箱庭を見て、筆者は Y 子に心理的葛藤を見い出せず、また、小学校 5 年生としての心の躍動のなさも感じていなかった。

約 1 ヶ月後の 12 月に、第 2 回目の箱庭の作成を行った。写真②は、その時のものである。第 1 回目の作品と比べると、ミニチュアのほとんどのものが、前回に使用されたものである。そ



写真①

して、中央にあった食卓テーブルがなく、角に置かれていた。

写真③は、平成3年6月、登校を再開した頃に作成したものである。動物がはじめて登場し、しかも、親子のゾウや、トラが仲良く並んで大仏の方を向いている。今までと同じ家具類を用いた空間とこれらの動物のいる空間とが柵を用いて仕切られており、そして、中央で相互につながっている。第1回目から第3回目製作の箱庭すべてに同じ家具類が用いられている。この写真③からは、心理的な安定感やY子の優しさ、暖かさを感じることができる。

## 2 自画像による表現

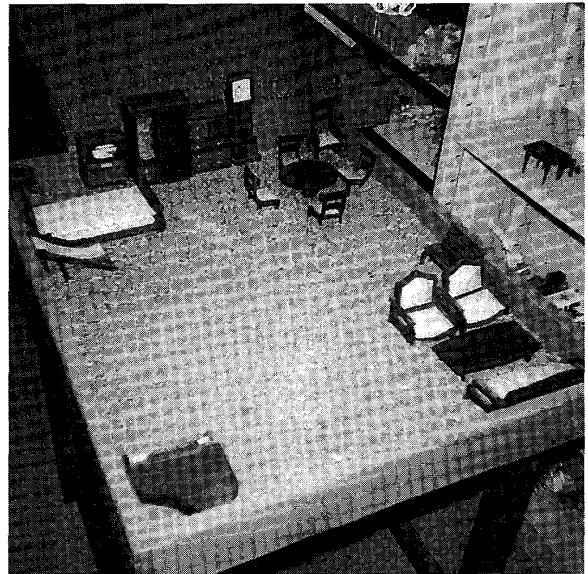
「児童生徒は何を描くか、それは何故か」という児童画を長年研究したケログ女史の著書<sup>(3)</sup>がある。児童の絵画の解釈には深い理解を必要とするが、筆者は、教育相談を担当し、対話が成立しないB子とのかかわりで、コミュニケーションの一助として自画像を描かせた。

B子は、中学校2年生で平成5年8月に母親とともに教育相談に訪れた。中学校2年生になり突然学校に行けなくなり、家庭に閉じこもっていた。

絵①は、面接相談に対して、会話がなかなか成立しないことから、何でもよいから自由に書かせた作品である。不登校状況に陥り、自室に閉じこもり気味な頃の作品である。「本人が背を向け、不安に怯えて心を閉ざしている様子」がうかがい知ることができる。こうした絵から本人のどのような心的印象を解釈するかは、相談担当者と本人との人間関係が反映するとともに、絵そのもののが本人にとってどのような意味を表すかを考慮することが大切である。

この作品を見て、筆者は本人が言い表わしたい何かをもちつつも、自己のなかに閉じこめている強い思いを感じた。非常に真面目に物事をとらえる傾向の強い本人は、学校生活に対することも、家庭での状況についても固く口を閉ざし、多くを語ろうとしない。特に、家庭における生活状況や、父や母にかかわる話にはほとんど無関心を装っていた。

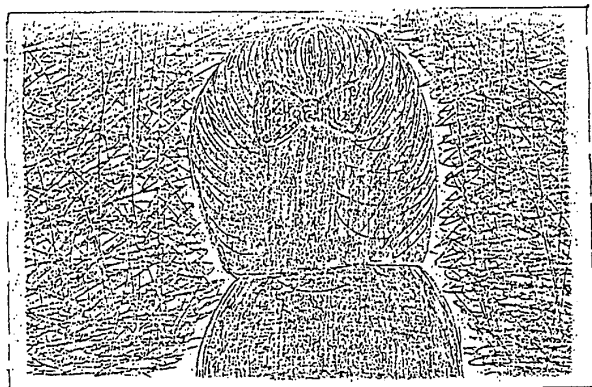
絵②は、徐々に家庭生活でも明るさを取り戻し、学校復帰が期待される頃の作品である。自



写真②



写真③



絵 1



絵 2

室の状況を描き表わしたものであるが、窓が開かれ、絵①を描いた同一人物の作品とは思われないものである。この②の絵をもとにした会話の中でB子は初めて、「母は干渉すぎる。父は冷たい、早く一人で暮らしたい」等と自己の思い、将来への希望などを言葉を通して、表明した。また、自分の趣味や特技、普段の生活の様子などを堰をきったかのように語りだすほどにB子は変化した。

児童生徒の表現は、それが単なる心情の吐露ではなく、表現する過程を通して、本人が自己の内部の葛藤の様相を自覚するとともに、相談担当者にとっても不登校の原因や本人の意外な面の発見に繋がることなくない。

#### Ⅳ おわりに（考察に代えて）

Y子が登校を開始したきっかけは、3年間にも及ぶ本人の不登校状況の改善が見られないことに対する母親の心労が重なった発病、入院であった。B子も、自己表現が可能になった頃から、高等学校への進学を希望し、学校復帰への意欲が高まり、登校をはじめよう生活全体が改善された。

両者に共通している言えることは、箱庭や絵画による自己表現は、単なる表現ではなく、本人たちの自己確立の一治療技法であるということであった。未熟な筆者は、当初、箱庭も絵画も児童生徒理解の一手法としての位置付けから活用する思いが強かった。また、面接相談の一手法として、どのように言語表現ができない子供たちから、その思いや気持ちを引き出したらよいかという、筆者の個人的な課題を回避するための便法であった。しかし、この二つの事例を振り返り、Y子とB子の作品を省みると、そこには、まぎれもない彼女たちの心的表現、語るに語れない葛藤がみられる。そのことを共有できなかったカウンセラーとしての資質、力量不足を痛感するのである。

Y子の作品からは、日常の家庭生活における、潔癖さが感じ取られる。整然とした家具類や不登校状況にもかかわらずピアノのレッスンには毎週欠かさず通うといった生活、箱庭の中の砂には一切触れず、ただミニチュアを置くといった表現に、母親の神経質的なY子へのかかわ

りから受けた憶病さが感じ取られる。B子は、母親や父親の言うなりになっていた今までの自己からの超出が、親への不満という直接的な言葉で表現できず、また、自己をどのように理解したらよいか悩んでいたと考えられる。

デューイは言う<sup>(4)</sup>。

きわめてわずかな体験でも一般化してそこからどれだけかの理論（あるいは何らかの知的内容）を作ることができるが、体験を無視した理論は、理論としてさえ理解されえない。どんなささやかなものでも体験は、巨大な量の理論よりもすぐれている。理由は簡単、如何なる理論も体験によってのみ生命をもち、また、正当さを証明され得るのである。われわれは教育において問題の処理に際し、言葉を観念だと思って使用するから、現実における解決はただ知覚をあいまいにするだけとなる。したがって、われわれは問題をも問題としては把握することができなくなってしまう。

筆者は、この言葉に勇気づけられ、この事例を担当してきた。現在、北海道立砂川少年自然の家が主催する事業には、延べ人数 16 名の児童生徒、母親、教師が不登校状況の改善のため参加している。また、これまでに実施された事業には 3 名の学生ボランティアが、熱心に指導に当たっている。これらの児童生徒、保護者、学生とのかかわりを通してさらに研究を深めていきたい。

## 注

- (1) 川村道夫（現北海道遠軽郁陵高等学校長）は、昭和 63 年 4 月から平成 7 年 3 月まで、北海道立教育研究所教育指導研究部に所属し、登校拒否の児童生徒の相談活動を担当した臨床経験の豊富な研究者である
- (2) 川村道夫、「自己表現の未熟な子へのかかわり」、北海道教育 No.123、北海道立教育研究所、平成元年 11 月、p.28-29
- (3) Kellogg, Rhoda. "What Children Scribble and Why". Palo Alto, California: National Press (out of print)
- (4) Dewey, John. "Democracy and Education". New York Macmillian Co. 1916, p.169